

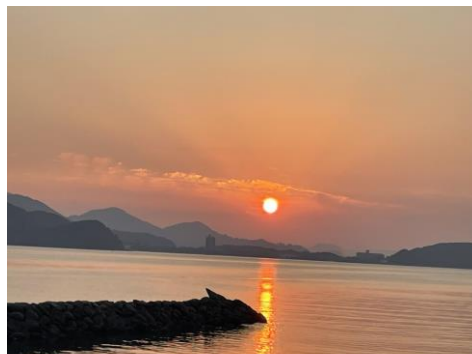
周辺からの記憶 37

東日本・家族応援プロジェクト 2020 in 宮古

村本 邦子(立命館大学)

11月19・20日、対人援助学会第14回大会は、「新潟水俣病と私たち」をテーマにオンライン開催した。水俣病については、水俣にご縁がありしばしば訪れる機会があることから、比較的長く関心を向けてきた。新潟水俣病については、佐藤真監督による「阿賀に生きる」「阿賀の記憶」を観たインパクトは大きく胸に刻まれていたものの、体系立てて勉強したことがなく、2回にわたる研究会で事前勉強させてもらった。動画配信による現地フィールドワーク、斎藤恒さんのお話、また妊娠規制をめぐるシンポジウムなど、大変充実していた。公式に語られにくい貴重なエピソードがいくつも出てきて、それだけに書物で読むのとは違うリアリティが感じられるものだった。

最近、野口友康(2022)『犠牲のシステムとしての予防接種施策』(明石書店)を読んで、ワクチン被害の考え方を学んだところだが、薬害エイズ、水俣病、福島子ども甲状腺がんなど、その根底にあるものは相似形だ。どうしてこんなふうになってしまうのか。命を大切にするということと自然を大切にするということは同一線上にあって、経済優先とは相反するのだろう。國部克彦(2022)『ワクチンの境界—権力と倫理の力学』(アメージング出版)によれば、種痘の歴史研究から「百分の一の倫理」ということが言われるようになったそうだ。一人の命は百人の命と比較できないという意味である。12年にわたって東北に学ばせてもらったことは、まさにそのことだった。今こそ、土地に根差した暮らしや土着性を取り戻すことが必要なのだと思う。



準備

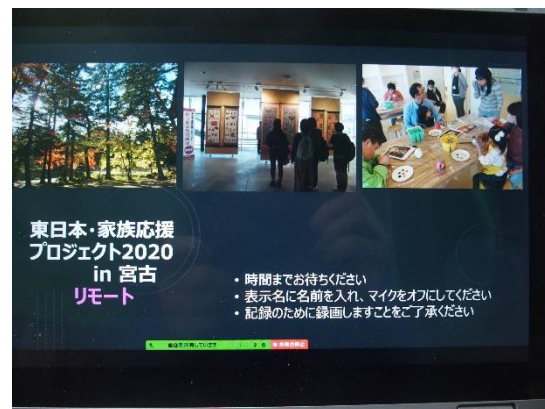
宮古もオンラインである。今回も担当院生3名と企画委員会を立ち上げ、2回の準備会を持った。オンライン・イベントの開催も少しずつ慣れてきて、新たなアイデアも出てきた。今回、全体像の紹介は企画委員によって準備された動画をオンデマンド方式で参加者に見てもらえるようにしたこと、バーチャル・フィールドワークとして、現地の様子やメッセージを動画で流したことである。工夫できることはいろいろある。災厄は創造力を引き出すものだ。

オンデマンド方式の紹介では、岩手県におけるプロジェクトの経過、初年度は遠野、二年目は大船渡で開催し、三年目に宮古に行きついたこと、また先輩たちの活動報告から現地の様子や変化、共催団体、協力団体のことや会場となった場について、プログラムやフィールドワークの紹介があり、とてもわかりやすく、見ていて懐かしかった。担当院生たちも、現地に行くことはできなかったが、先輩たちの報告を辿るなかでイメージが広がったことだろう。企画委員たちのまとめの言葉である。

10年間プロジェクトを続けることの意味が記録から伝わってくる。「年輪のように毎年毎年の積み重ねによってプロジェクトが育つ。」「さまざまな『事実』を身体で『知る』ことが、現地に行くことの意義なのだろう。」「積み重ねることによって得る信頼関係、安心感、そして、広がっていく輪に参加することによって感じる事ができた。その土地を知る。」東日本大震災を風化させてはならない。田老地区の強い防災への意識から

学ぶことが多くあり、私たちがつなげていかなければならない。故郷の歌、物語、食文化、大切にしたいことが、岩手にたくさんある。調べていると、宮古（岩手）で実際に人と出会い、見聞きしている先生や先輩方がうらやましくなってきた、宮古への思いが募ってきた。

オンラインでも十分に現地への思いをつなぐことができるのだ。



11月7日（土）10:30~11:30

遠野の民話を味わおう

最初の企画は、大平悦子さん（遠野市出身、日本民話の会）による「遠野の民話を味わおう」だった。鶴野さんが聴き手となり、遠野に伝承されてきた昔話を遠野の言葉で語ってもらった。

全部で5つの語りを紹介して下さったが、楽しい民話から始まって、過去の飢饉を題材にした遠野物語第53話「郭公と時鳥」や第99話「大津波」など、この地域が幾度も自然災害に見舞われてきたことがわかる。民話には過去の事実が地続きで伝承されており、語り手である大平さんが、人々の東日本大震災の被災経験を聞くなか

で、話の解釈が変化していったというエピソードも興味深い。

バーチャルで語りの素晴らしさがどれほど伝わるのか懸念もあったが、大平さんの語りは、そんなことを忘れさせるような素晴らしいもので、参加者の皆さんは、

「『きいておくれんせ』から始まる大平さんの語りは、遠野のことばが耳に心地よく、目の前にその情景が浮かんだ」「大平さんの暖かい方言で語られる民話をお聞きした。慣れ親しんだことのない方言のはずなのに、とても優しく耳に馴染み、懐かしい気持ちになった」とそのままに受け留めてくれたようだ。いつものように、パチパチと火が音を立て、煙がくすぶる囲炉裏の前でお話を聴くに勝るものはないが、バーチャルで聞く民話も意外と良いものだった。



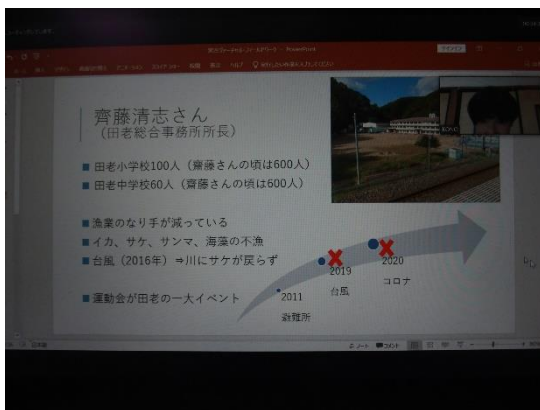
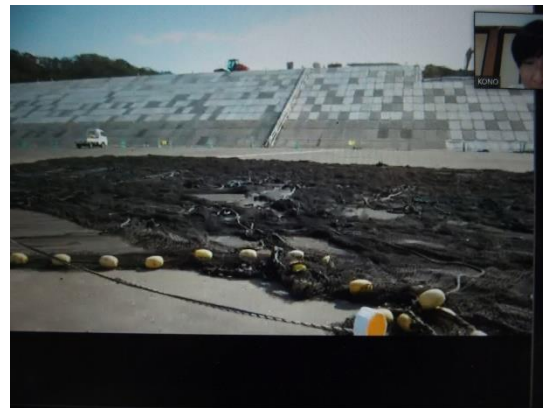
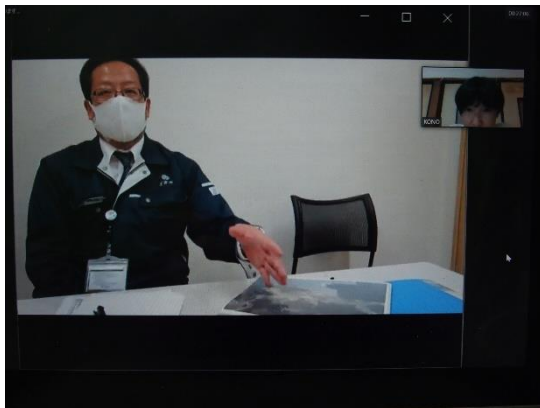
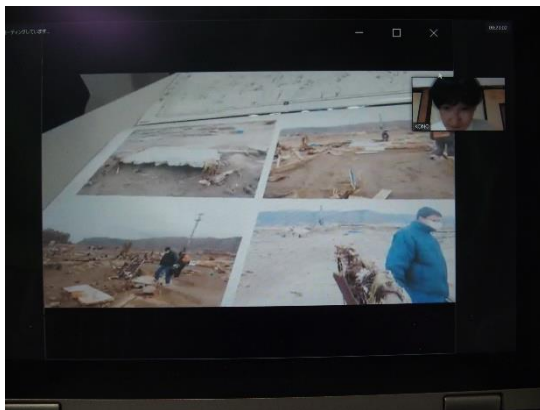
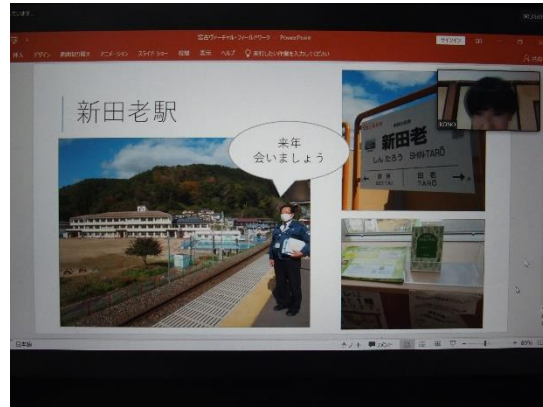
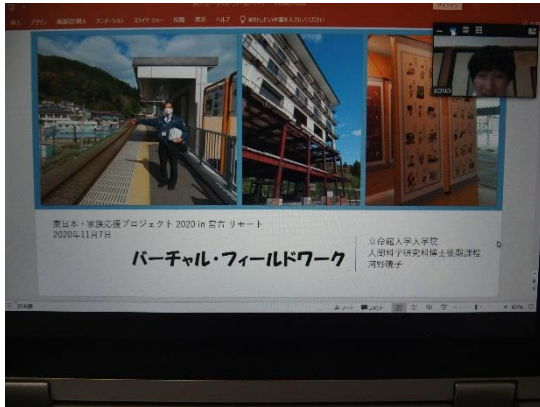
11月7日（土）13時-14時半 バーチャル・フィールドワーク

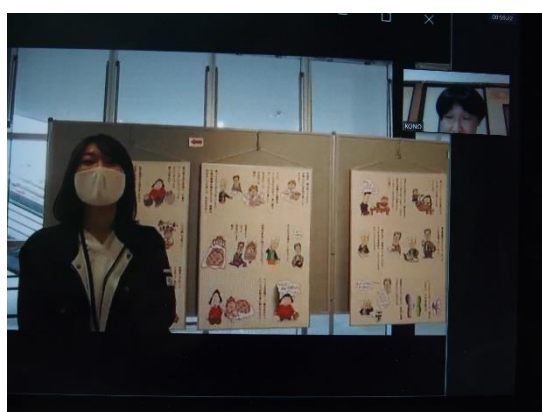
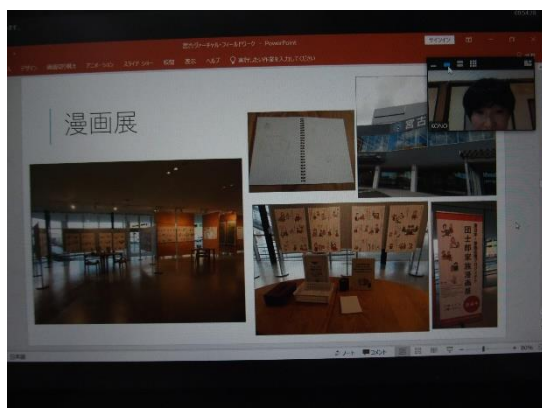
午後のプログラムは「バーチャル・フィールドワーク」と称し、河野暁子さんが現地で撮影した写真や動画を交えながら、宮古の町の様子を紹介してくれた。齊藤清志さん（田老総合事務所）、佐々木純子さん（田老学ぶ防災ツアー）、佐藤芙生子さん（宮古市市民交流センター）からのメッセージに、漫画展の様子を見て、まるで宮古に行ったような気分になった。現地の動画を共有することで、現地を知らない院生たちにもその場の雰囲気が伝わり、これまで行ったことのある者には、現地とのつながりを再確認する懐かしい時間となった。今後のプロジェクトの展開にも、いろいろヒントを与えてくれそうだ。

佐々木さんの「ツアーで語るのは悲しい話だけれど、伝えていきたい。ツアーで沢山のひとと出会えたことが財産だ」という言葉に、また田老まで行かなければと思う。コロナ禍で、県内の子どもたちの訪問が増えたそうだ。

後半は、河野さんが研究テーマでもある「大船渡の祭りに見る震災からの復興過程」について話してくれた。

参加者からは、「実際に現地に行っている感覚に陥りました。インタビューの様子から現地の方の気持ちが伝わり、胸に迫るものがありました。」「現地に行っていないのに、本当に行ったかのような満足感でした。現地の方たちのメッセージを動画で撮影して下さったことによって、生の声が聴けて、その中から学ぶことがたくさんありました」などの声が寄せられた。リモートプログラムの可能性が、またぐんと広がった。





11月7日（土）15時-16時 宮古の9年を振り返って

その後、「宮古の9年を振り返って」と題して、リモートで、鷺田敦子さん（社会福祉法人若竹会はあとふるセンターみやこ多機能事業所すきっぷサービス管理責任者）と佐々木伸子さん（宮古市地域福祉課）に、宮古の復興状況や現在の状況などについて話してもらった。

実際に宮古でプログラムを実施している時は、お互い運営に集中しているので、ゆっくりお話をお聞きする時間がなかなか取れなかったが、今回は「一市民として震災から十年を振り返って感じていること」や「支援者として経験してきたこと」をご自身の言葉で語ってくださった。これまでさまざまな葛藤を抱えながらも、その都度決断して前に進んでこられたことが伝わってきた。「離れているけど、震災のことを忘れないでいてくれる人がいることは心強い。だからこそ風化させないで、きちんと伝えていくのが地元に住んでいる者の責任である」と言う。

参加者からは、「支援者でありながら自分も被災者であるという立場の方のお話を聞かせて頂けたことは、とても貴重な体



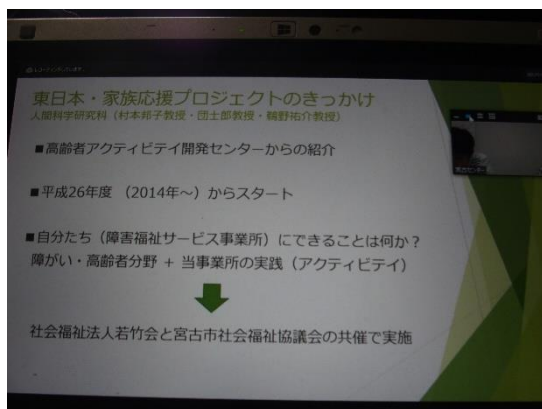
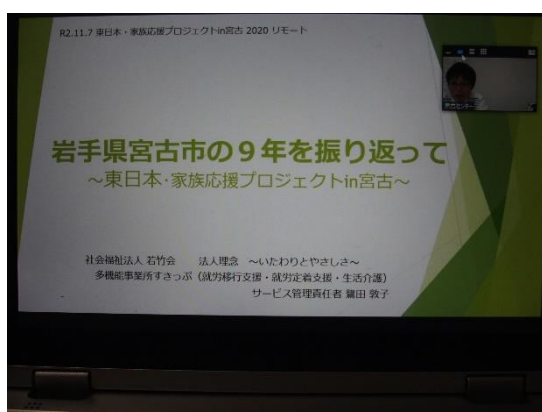
験となりました。自分自身も支援者として震災が起きたらどうすればいいのか考えさせられました」「現地の方の生の声はとても胸に響きます。震災当初からどのようにこれまでを生きてこられたのか、被災地の住民としても、また対人援助職に携わる者としても、様々な思いを抱えてこられたことが伝わってきました」など、それぞれに考えることは多かったようだ。

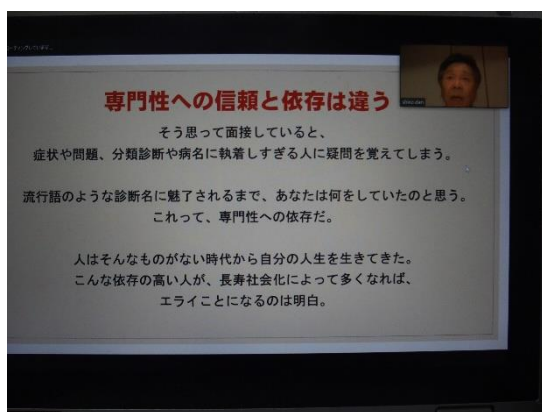
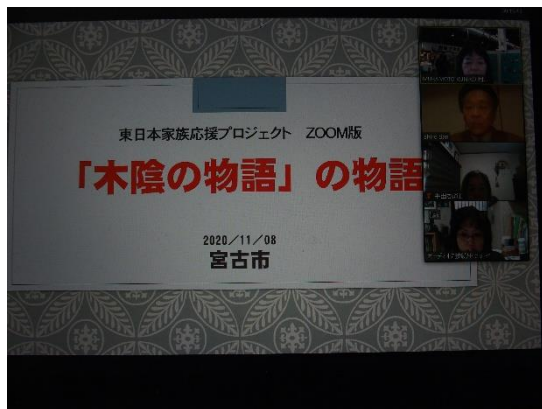


11月8日（日）10時半-12時 団士郎 漫画トーク

11月8日(日)午前は、団士郎さんの漫画トークだった。「アースカラー」と「ソロ泊」という二つの作品をもとに、ブレイクアウトルームで感想をシェアした後、団さんのトークが続く。ブレイクアウトルームを使ったバズセッションは結構評判がよく、普段出会わない遠方の人と一緒にいるなど、偶発的な組み合わせが面白い。

現地の参加者から、「いつも楽しみにしています。主体的に生きることの大切さを、改めて感じることもできるお話でした」「団先生の話を聞いていると、いつも元気になります。自分自身の考え方を見直すいい機会になっています。感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました」「今回参加させていただくのは3回目ですが、毎回聞いて良かったと思えるお話です。漫画自体もそうですが、その前後の団先生のお話はとても面白くて興味深く、自分の今後につながるお話ばかりだと感じます」と喜んでもらっていることが伝わり、こんな形でも継続できてよかったとあらためて思う。





11月8日（日）13時-13時40分 宮古の歌と紙芝居ライブ

午後は、宮古市在住のミュージック・パフォーマー尾林星さんによる宮古の歌と紙芝居ライブだった。星さんは、ずっとプログラムに協力頂いていたNPO法人「輝きの和」代表・須賀原チエ子さんの義理の息子にあたり、2016年と2017年にもプロジェクトに参加してくれていた。星さんは、サプライズで、浄土ヶ浜からのライブを試みてくれようとしていたが、電波の状況が悪く、車で自宅に戻ってのオンラインとなった。浄土ヶ浜ライブが叶わなかったのは残念だったが、星さんの気持ちがありがたい。

紙芝居は民話を題材にした「しろこ地蔵」で、歌は、宮古の郷土菓子「すつと

ぎ」「ひゅうず」の作り方を歌ったものや、宮古をテーマにした「カラフルMIYAKO」など全6曲のオリジナルだった。2017年に魚菜市場でプログラムをやった時に、「すつとぎ」の曲が市場に流れたのを聞き、お菓子屋さんが、「これがすつとぎだよ」とお菓子を持ってきてくださったことが懐かしい。「すつとぎラブストーリー」の歌詞はこんなふうである。

すつとぎすつとぎすつとぎのストーリー

青大豆を洗って 一昼夜水につけ置き

沸かしたお湯に塩ひとつまみ

大豆を入れて強火

すつとぎすつとぎすつとぎのストーリー

アクとりながら7分 柔らかくなったら湯を切る

ボウルに水張り 大豆ボッチャン 素早く洗って冷ます

別のボウルを用意して うるち粉 砂糖 塩を混ぜ混ぜ

冷ました大豆をすりつぶしてボウルの中身と混ぜて混ぜて

もう一回すりつぶしてコネコネ

生地を分けましょう 300g

直径5cm ながさは20cm

好みの厚さに切り分け

ほら完成 We have Suttogi

星さんは、2013年、関東から宮古に移り住んできたそうである。そして、「カラフルMIYAKO」を書いた。

未来の種を いっぱいまいて

芽吹いて咲いて みのり分け合う

海風かおる 港に立てば
森の子供が 手をふる MIYAKO

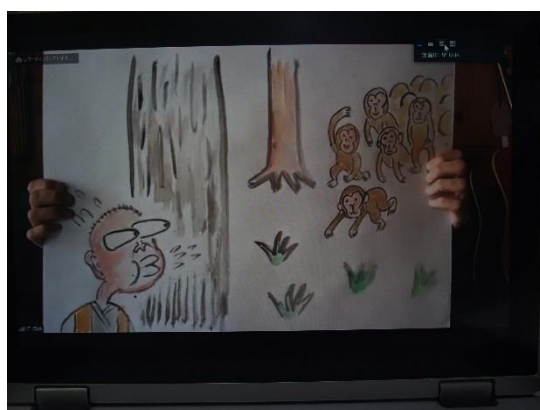
何もないところから 始めるのは怖いけど
じっとしてられない 今日は一度
何か動いてる 誰かが呼んでいる
そっとよりそうように 耳をすませて

必死にサケが 川を登って
命の限り 光を運ぶ
恋人たちも 動物たちも
夕風の中 手をふる MIYAKO

遠い昔のこと 僕らのご先祖さまが
植えた花の匂いを 嗅ぎながら
どうか隠さないで もえるような想いを
ちゃんと伝えたい 心尽くして

未来の種を いっぱいまいて
芽吹いて咲いて 実りを祈る
日の出と共に 目を覚ましたら
手をふる太陽 パワフル MIYAKO

参加者からは、「星さんの歌に元気づけられました。歌詞からも宮古の情景が伝わってきました。ありがとうございます」「地元の人間でありながら、地元の良さを再確認できました」「とても素敵な企画でした。すつとぎの歌が頭から離れなくなっています。すつとぎを食べてみようと思います。星さんの歌を生でぜひお聞きしたいです。ありがとうございます」など、多くの声が寄せられた。





11月8日（日）14時-15時 支援者交流会

その後、プロジェクトメンバーと若竹会の鷺田さんや宮城民話の会の加藤さんを囲む交流会を持ち、これまでのプロジェクトを振り返り、来年度の開催のあり方や、十年が終了したその後の取り組みについてのアイデアを出し合った。オンラインの可能性について積極的な意見が多く、同じくらい「やっぱりリアルで会いたい、現地に行きたい」という声があった。他の災害地域とつながる機会を持ったり、東北4県民話語り合いなどもできないかと、11年目以降のアイデアがたくさん出た。

「土地の力」を知ること、「遠くのゆるやかなつながり」は大災害の時に効力を発

揮する。そんな力となる継続の可能性を考えたいと思った。

コロナ禍でこのような形の開催となったが、現地へ赴かずとも、民話、語り、風景、歌などを通じて宮古を味わい、深く知り、繋がりを感じられる豊かなプロジェクトだった。十年の節目を迎えた後に、このつながりをどういう形で継続していくかという問いに、このコロナ禍がもたらしたオンラインというツールを駆使した 2020 プロジェクトがおおきなヒントを与えてくれた。



つづく